

60 分でわかる新約聖書 (11) 「ピリピ人への手紙」

1. はじめに

(1) ピリピ人への手紙の位置づけ

- ①獄中書簡と呼ばれるものが、4 つある。
- ②パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ③当時パウロは、皇帝ネロによる尋問が行われるのを待っていた。
- ④4 つの書簡とは以下のものである。

*エペソ人への手紙：テキコが届けた（エペ 6：21）。

*ピリピ人への手紙：エパフロデトが届けた（ピリ 4：18）。

*コロサイ人への手紙：エパフラスが届けた（コロ 4：12）。

*ピレモンへの手紙：オネシモが届けた（ピレ 1：10）。

・オネシモは、コロサイの主人の元から逃亡した奴隷である。

⑤4 つの書簡のテーマ

*エペソ人への手紙

- ・教会は、キリストのからだである。
- ・この場合の教会は、普遍的教会である。

*ピリピ人への手紙

- ・クリスチャン生活は喜びに満ちたものである。
- ・私たちは、キリストにあってなんでも出来る。

*コロサイ人への手紙

- ・キリストは、教会の頭である。

*ピレモンへの手紙

- ・異教社会におけるクリスチャンの行動の原則は、愛である。

(2) ピリピという町

- ①当時ピリピは、ローマの「植民都市」（コロニー）であった。
 - *植民都市は、軍事上の拠点となる地に設立された町である。
 - *まさに小ローマがそこに存在したということである。
 - *住民にはローマの市民権が与えられ、税制上の特権も与えられた。

④新約時代におけるピリピの重要性

*農業生産、海路と陸路をつなぐ通商の拠点、金鉱、植民地、医学学校

(3) パウロとピリピの関わり

- ①ルカは、ピリピ伝道に最多のスペースを割いている（使 16：12～40）。
 - *第二次と第三次伝道旅行で訪問したどの町の情報よりも多い。

- ②ピリピは、パウロが伝道した最初のヨーロッパの都市である。
- ③福音が、アジア大陸からヨーロッパ大陸に伝わったのである。
- ④最初に、紫布の商人リディアとその家族が救われた。
- ⑤次に、牢獄の看守とその家族が救われた。
- ⑥かくして、ピリピに教会が誕生した。
- ⑦この手紙は、パウロからピリピの信徒たちに宛てられたものである。

(4) 執筆の経緯

- ①ピリピの教会は、エパフロデトに「贈り物」を託して、パウロに送った。
- ②エパフロデトは、パウロを支えるためにそこで働き始めたが、病気になった。
- ③エパフロデトの病気が治ったので、パウロはピリピに彼を送り返す。
- ④その際、パウロはこの手紙をしたため、彼に託した。
- ⑤執筆年代は、60 年から 61 年頃と推定される。
- ⑥この手紙のキーワードは「喜び」である (関連した表現が 19 回も出て来る)。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 試練の中にある喜び (1 : 1~30)
- (2) 奉仕の中にある喜び (2 : 1~30)
- (3) 信じることの中にある喜び (3 : 1~21)
- (4) 与えることの中にある喜び (4 : 1~23)

ピリピ人への手紙について学ぶ。

I. 試練の中にある喜び (1 : 1~30)

1. パウロの感謝 (3 節)

Php 1:3 私は、あなたがたのことを思うたびに、私の神に感謝しています。

- (1) 「あいさつ」が終わると、パウロは最初に感謝の言葉を書いている。
 - ①彼が感謝している相手は、神である。
 - ②ピリピ伝道では、パウロは投獄され、むち打ちの刑にも会った。
 - ③神の恵みの大きさのゆえに、苦しい体験を忘れているかのようである。
- (2) ピリピの教会が誕生したのは、神の恵み以外の何ものでもない。
 - ①ピリピの教会に注がれた神の恵みは、パウロ自身も経験したことである。
 - ②「罪人のかしら」が、「キリスト・イエスのしもべ」とされた。
 - ③人に与えられる最も名誉ある称号は、「キリスト・イエスのしもべ」である。

2. パウロの確信 (6 節)

Php 1:6 あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。

(1) 「良い働き」とは、聖霊の働きによって生まれ変わる事(新生)を指す。

①イエスを主と告白した人の中には、すでに聖霊の働きが始まっている。

②新生した人は、次に聖化の過程に導かれる。

*これもまた、聖霊の働きである。

③やがて私たちの姿は、栄光の姿に変えられる。これが栄化である。

*「キリスト・イエスの日」とは、携挙の時を指す言葉である。

3. パウロの喜び (18 節)

Php 1:18 しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでます。／そうです。これからも喜ぶでしょう。

(1) 投獄されたことが、かえって福音の前進に役立った。

①投獄によって、福音に興味を示さなかった人々が、関心を持つようになった。

②パウロの勇気と大胆さによって、他のクリスチャンたちが励まされた。

(2) 福音を語る動機が異なる 2 つのグループがいた。

①パウロを苦しめるためにキリストを宣べ伝えている人々がいた。

②愛をもってキリストを伝える人々がいた。

③動機を問題にするなら、前者の伝道は容認できないものである。

④しかしパウロは、それをも喜ぶと表明している。

*キリストが崇められ、宣べ伝えられているなら、自分はどうでもよい。

⑤「究極的な救い」とは、神から無罪宣告とおほめのことをいただくこと。

⑥「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です」

II. 奉仕の中にある喜び (2 : 1~30)

1. 一致の勧め (1~2 節)

Php 2:1 ですから、キリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、

Php 2:2 あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。

(1) クリスチャンは、父なる神の愛情と憐れみをお互いに対して示すようになる。

①慰め、励まし、交わり、憐れみといったキーワードに注目しよう。

②これらは、父なる神から発し、キリストを通して神の子たちに与えられる。

③キリストにつながり続けるなら、一致を保つことができる。

2. 私たちの手本 (6～8 節)

Php 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、／神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、／人間と同じようになられました。／人としての姿をもって現れ、

Php 2:8 自らを低くして、死にまで、／それも十字架の死にまで従われました。

(1) 謙遜な人となる秘訣は、キリストの生き方にならうことである。

①キリストは、地上生涯で常にへりくだり、他者を配慮する生活を貫かれた。

(2) キリストのへりくだり

①キリストは、天地が創造される前から神として存在しておられた。

②しかしキリストは、「神のあり方」に固執せず、私たちと同じ人間の姿を取って地上に誕生し、人間として地上生涯を送ってくださった。

③キリストは神としてのあり方を捨てたが、神でなくなったことはない。

④神が人となられたということこそ、最大の奇跡である。

⑤このような犠牲を払ってくださったのは、私たちを愛する愛のゆえである。

3. 私たちの応答 (13～14 節)

Php 2:13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。

Php 2:14 すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。

(1) この聖句は、クリスチャンに積極的な生き方を提示してくれている。

①キリストとともに歩んでいるなら、心に聖い志が与えられる。

②なんらかの願いが与えられたなら、神からのものとして受け止めてよい。

③自己中心的な動機から出たものであるなら、神はそれを教えてくださる。

(2) 願いの実現のためには、「**すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行なう**」。

①その人は、純真な者、傷のない神の子、世の光となる。

②そのような人生を歩ませてくださった神をほめたたえるようになる。

③聖化を求める生活は、神的受動態である。

Ⅲ. 信じることの中にある喜び (3 : 1～21)

1. ユダヤ主義者を警戒するようという警告 (2 節)

Php 3:2 犬どもに気をつけなさい。悪い働き人たちに気をつけなさい。肉体だけの割礼の者に気をつけなさい。

(1) ユダヤ主義者の誤った教え

- ①彼らは、割礼を受けないと救われないと教えていた。
- ②パウロは、ユダヤ主義者のことを「犬ども」と呼んでいる。
 - *犬は、自分が吐いたものに戻って行く。
 - *彼らは、福音に触れながら、もとのユダヤ教の教えに戻って行った。
- ③彼らは「悪い働き人」である。
 - *キリストにある赦し、喜び、誇りを奪っていくからである。
- ④さらに、「肉体だけの割礼の者」で、心に変化がない者たちである。
- ⑤信仰以外に何かを付け加えようとする人は、現代のユダヤ主義者である。

2. パウロの過去と現在 (7～9 節)

Php 3:7 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。

Php 3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくたと考えています。それは、私がキリストを得て、

Php 3:9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。

(1) パウロの過去

- ①8 日目の割礼を受け、ベニヤミン部族の出身である。
- ②律法を厳格に守るパリサイ人であった。
- ③教会を迫害するほど熱心であった。

(2) パウロの現在

- ①キリストを知ったことで、価値観、世界観が 180 度変化した。
- ②以前は誇りと思っていた事がらを、今は損と思うようになった。
- ③キリストの十字架以降は、恵みの時代になった。
- ④今まで大事にしてきたものは、「ちりあくた」である。
 - *犬に与える食べ物

3. パウロが追求する 3 つのもの (13～14 節)

Php 3:13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、

Php 3:14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。

- (1) パウロは、キリストというお方をさらに深く知ることを追及している。
 - ①キリストは、日々私たちに驚きと喜びの発見へと導いてくださる。
- (2) パウロは、キリストの復活の力を知ることを追及している。
 - ①その力とは、キリストの復活が信者にもたらした力のことである。
 - ②それは、信者に死後の復活の希望を与え、今の時の試練に勝たせる力である。
- (3) パウロは、キリストの苦しみにあずかることも追及している。
 - ①苦難、迫害、戦いさえも、神からの贈り物である。
 - ②宣教のための苦しみは、キリストとともに苦しむことであり、それは将来の復活の希望につながることである。

IV. 与えることの中にある喜び (4:1~23)

1. 一致の勧め (1~2 節)

Php 4:1 ですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。このように主にあって堅く立ってください。愛する者たち。

Php 4:2 ユウオディアに勧め、シンティケに勧めます。あなたがたは、主にあって同じ思いになってください。

- (1) パウロは、具体的に名前を挙げて、一致の勧めをしている。
 - ①ピリピ教会の中に、指導者同志の不一致があったのであろう。
 - ②「一致」とは、意志の統一ことではなく、聖霊の思いを共有することである。

2. いつも喜ぶ (4~6 節)

Php 4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

Php 4:5 あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。主は近いのです。

Php 4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

- (1) この喜びには、「主にあって」という修飾語が付いている。
 - ①置かれた状況のいかんにかかわらず、キリストを知り、キリストに知られ、必ず最善がなされると信じる者には喜びが伴う。
 - ②喜びの理由を探してみましょう。
 - ③神の恵み、神の愛、与えられた人生、家族、健康、食物、住居、衣服、教会、

信仰の友、職業……。リストは尽きない。

(2) 祈れば平安になる理由

- ①その平安は、「キリスト・イエスにある平安」である。
- ②「人のすべての考えにまさる神の平安」である。

3. 贈り物への感謝 (10 節)

Php 4:10 私を案じてくれるあなたがたの心が、今ついによみがえってきたことを、私は主にあって大いに喜んでいます。あなたがたは案じてくれていたのですが、それを示す機会がなかったのです。

- (1) パウロを思い出し、贈り物を送ってくれたことに感謝の意を表している。
- (2) 続いて彼は、金銭に対してどのような態度を取るべきかを教えている。
 - ①貧しさにいかに対処すべきかを心得ている。
 - ②豊かなときにもいかに生活すべきかを知っている。
 - ③どのような境遇にあっても、それに対処する秘訣を心得ている。

4. 終わりの挨拶

- (1) 「どうか、主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように」
 - ①クリスチャン生活は、イエス・キリストの恵みによって始まり、イエス・キリストの恵みによって完成する。
 - ②日々、この恵みによって父なる神に近づき、この恵みによって生かされ続けようではないか。

60 分でわかる新約聖書 (12) 「コロサイ人への手紙」

1. はじめに

(1) コロサイ人への手紙の位置づけ

- ①獄中書簡と呼ばれるものが、4 つある。
- ②パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ③当時パウロは、皇帝ネロによる尋問が行われるのを待っていた。
- ④4 つの書簡とは以下のものである。

*エペソ人への手紙：テキコが届けた（エペ 6：21）。

*ピリピ人への手紙：エパフロデトが届けた（ピリ 4：18）。

*コロサイ人への手紙：エパフラスが届けた（コロ 4：12）。

*ピレモンへの手紙：オネシモが届けた（ピレ 1：10）。

⑤4 つの書簡のテーマ

*エペソ人への手紙

・教会は、キリストのからだである。

*ピリピ人への手紙

・クリスチャン生活は喜びに満ちたものである。

*コロサイ人への手紙

・キリストは、教会のかしらである。

*ピレモンへの手紙

・異教社会におけるクリスチャンの行動の原則は、愛である。

(2) コロサイという町

- ①エペソの南東約 200 キロのところにある町（ヒエラポリス、ラオデキヤ）
- ②コロサイは、裕福で、人口も多かった（ユダヤ人と異邦人）。
- ③パウロは、コロサイを訪問したことがない。
- ④エペソでの 3 年間の奉仕により、エパフラスが救われた。
- ⑤彼がコロサイに戻り、教会を開拓した。
- ⑥教会は、ピレモンの家で集まっていた可能性が大である。

(3) 執筆の経緯

- ①エパフラスが獄中のパウロを訪問し、教会の現状を伝えた。
- ②コロサイ教会には、教理的逸脱があり、早急に対応する必要があった。
- ③教理的逸脱とは、後に「グノーシス主義」と呼ばれる異端の原型である。

(4) グノーシス主義の特徴

- ①「グノーシス主義」とは、宗教というよりは、一種の思想運動である。
- ②紀元 1 世紀から 2 世紀にかけて盛んになり、3 世紀には衰微して行った。
- ③その内容は多様であるが、おおよそ以下のような点が確認されている。
 - *グノーシスとは、「知識」「認識」などを意味するギリシア語である。
 - *人間は、ある「靈知」(グノーシス)を持つことによって救済される。
 - *その「靈知」をもたらすのがキリストである。
 - *徹底した靈肉二元論の立場を取った。
 - *靈は純粹で神秘的なもの、肉(物質)は罪悪性を持ち墮落したもの。
 - *聖書の創造論とは真っ向からぶつかった。
 - *世界を創造したのは絶対神ではなく、より下級の造物者である。
 - *そのため、物質界は罪悪性を持っている。
 - *人間が罪ある者である理由は、肉体を持っているからである。
- ④グノーシス主義は、聖書の重要な教理を否定する。
 - *絶対者である唯一の神が万物の創造者であるという教理の否定。
 - *イエス・キリストは、受肉した神の御子であるという教理の否定。
 - *人間は、恵みと信仰によって救われるという教理の否定。
- ④グノーシス主義は、肉体のみを罪悪視したため、内面にある罪の問題を考えることができなかった。
- ⑤その教えは、禁欲的、戒律的、密儀宗教的(靈の神秘性)であった。
- ⑥グノーシス主義は、福音とは全く異質の教えである。
- ⑦まとめ:キリスト教、ユダヤ教、ギリシア哲学の混合

(5) コロサイ人への手紙は、これらの異端的な教えに対する反論である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 聖書的キリスト論の宣言 (1:1~29)
- (2) 聖書的キリスト論の擁護 (2:1~23)
- (3) 聖書的キリスト論の実践 (3:1~4:18)

コロサイ人への手紙について学ぶ。

I. 聖書的キリスト論の宣言 (1:1~29)

1. 挨拶 (1~2 節)

Col 1:1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、

Col 1:2 コロサイにいる聖徒たち、キリストにある忠実な兄弟たちへ。私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたにありますように。

- (1) パウロは自分を「神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒」と呼ぶ。

- ①彼が書く手紙は、キリストの大使としての権威に満ちたものである。
- ②共同執筆者として、テモテの名も上がっている。

2. 罪の赦し（13～14節）

Col 1:13 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

Col 1:14 この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。

- (1) 神は私たちを「暗闇の力」から救い出してくださいました。
 - ①「暗闇の力」とは、サタンの束縛のことである。
 - *今もサタンは、この世の主権者として暗躍している。
 - ②信者はサタンの束縛から解放され、「愛する御子のご支配の中に」移された。
 - *私たちは、霊的盲目から解放され、聖霊の導きに従って歩む者とされた。
- (2) 私たちは、御子イエスにあって贖いと罪の赦しを得ている。
 - ①キーワードは、「御子イエスにあって」である。
 - ②イエスは、十字架の上で私たちの罪の代価を支払ってくださいました。
 - ③御子イエスを離れては、罪の赦しも、人格の清めも、救いの完成もない。

3. キリストの神性（15～16節）

Col 1:15 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

Col 1:16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。

- (1) キリストの本質を誤解すると、間違っただけのキリスト教になる。
 - ①コロサイ教会では、キリストを神以下の存在と見る教えが横行していた。
 - ②これは、グノーシス主義の教えそのものである。
- (2) 聖書的キリスト論
 - ①御子イエスは、「見えない神のかたち」である。
 - ②御子イエスは、人間とは全く異なった意味で「神のかたち」である。
 - ③御子は、天地創造の前から神のかたちを有しておられた。
 - ④父なる神と御子とは、本質において同じである。
 - ⑤御子イエスは、他の被造物に先立って「生まれた方」である。
 - *「生まれた」（プロトコス）は永遠の昔からの存在を表わしている。
 - *御子イエスは、万物の創造者でもある。

- ⑥御子は、父なる神とともに礼拝されるべきお方である。
- ⑦初代教会の中には、御子イエスの神性を疑問視する教師たちが多くいた。
- ⑧パウロは、それらの立場は異端的なものであることを明確にしている。
- ⑨同じ真理が他の箇所でも教えられている。

* ヨハネの福音書 1 : 1~18

* ヘブル人への手紙 1 : 1~4

* ピリピ人への手紙 2 : 5~11

4. 教会のかしら (18 節)

Col 1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となりました。

- (1) 教会は御子イエスのからだであり、御子はその教会のかしらである。
 - ①ここで言う教会とは、救われた者すべてを含む普遍的教会のことである。
 - ②御子イエスは、教会のかしらである。
 - ③教会が迫害に会う時、御子イエスご自身が迫害に会っている。
- (2) 御子は、死者の中から最初に生まれた方である。
 - ①最初に死人の中から甦ったという意味である。
 - ②かしらであるキリストにつながる者には、復活の希望が与えられている。

II. 聖書的キリスト論の擁護 (2 : 1~23)

1. 知恵と知識の宝 (3~4 節)

Col 2:3 このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。

Col 2:4 私がこう言うのは、まことしやかな議論によって、だれもあなたがたを惑わすことのないようにするためです。

- (1) 知識とは真理の認識であり、知恵とはその適用である。
 - ①キリストの内に隠されている宝を追求する人は、「まことしやかな議論」に惑わされることがなくなる。
 - ②キリストから離れた所で、信仰の成長や問題の解決を求めてはならない。
 - ③私たちは、自力救済が不可能であると知ったので、キリストに信頼を置いた。
 - ④その信仰の原点から離れてはならない。

2. 空しいだましごとの哲学 (8~9 節)

Col 2:8 あの空しいだましごとの哲学によって、だれかの捕らわれの身にならないように、注意しなさい。それは人間の言い伝えによるもの、この世のもろもろの霊によるものであり、キリストによるものではありません。

Col 2:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

- (1) グノーシス主義は、「空しいだましごとの哲学」である。
 - ①キリストに基づかないなら、高尚な教えも人間から出たものである。
 - ②聖書的キリスト教は、キリストから始まり、キリストに終わる。
 - ③キリストの内にこそ、神の満ち満ちたご性質が形を取って宿っている。

3. 偽教師たちが教えていた 4 つの過ち

- (1) 食べ物と飲み物について、惑わされてはならない。
 - ①モーセの律法には、清い食べ物と汚れた食べ物の区別があった。
- (2) 祭りや新月や安息日のことで、惑わされてはならない。
 - ①食物規定や祭りは、次に来るものの影であって、本体はキリストにある。
 - ②本体であるキリストが現われた今、影に縛られる必要はない。
- (3) 御使い礼拝に惑わされてはならない。
 - ①天使を礼拝し、幻を見るという特別な体験を誇る者たちがいた。
 - ②彼らは、自らの体験を誇り、キリストに結びつこうとはしない人々である。
 - ③キリストを愛すると言いながら、その心はキリストから遠く離れている。
- (4) 「つかむな、味わうな、さわるな」という教えに惑わされてはならない。
 - ①これらの教えは、人間の戒めや教えによるものである。
 - ②キリストとともに死んだ者は、この世の教えから解放されている。

Ⅲ. 聖書的キリスト論の実践 (3 : 1~4 : 18)

1. 上にあるものを思う (1 節)

Col 3:1 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。

- (1) 正しい理解とそれに基づく行動
 - ①聖書的自己認識を持つことが重要である。
 - *キリストを信じた人は、すでに死んでいる。
 - *罪に対して、この世に対して、また肉の欲望に対して、死んでいる。
 - *またキリストとともに甦らせられ、天に上げられた。
 - *肉体は地上で生活をしているが、霊的な実体は天にある。
- (2) 天では、キリストが神の右に着座しておられる。
 - ①神の右に座を占めるとは、権威ある地位に就いておられるということ。

- ②どのようなことが起ころうとも、キリストが状況を支配しておられる。
- ③この確信によって、試練の中でも慰めを得ることができる。

2. 過去との決別 (9～10 節)

Col 3:9 互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは古い人をその行いととも脱ぎ捨てて、

Col 3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたちに仕がって新しくされ続け、真の知識に至ります。

- (1) キリストを信じた人の内側には、新しい葛藤が始まる。
 - ①古い性質 (肉の思い) と新しい性質 (御霊の思い) の間に起こる葛藤である。
 - ②地上のからだの諸部分を殺す。「むさぼり」は偶像礼拝である。
 - ③心の中にある汚れを捨ててしまう。
 - ④互いに偽りを言うてはならない。
- (2) 正しい自己認識が正しい行動につながる。
 - ①私たちは神に選ばれた者、聖なる、愛されている者である。
 - ②私たちの罪の代価は、主イエスの十字架の死によって支払われた。
 - ③私たちは、キリストにあって一つとなるために召された。
 - ④私たちは、父なる神に感謝する者とされた。

3. 人間関係

(1) 夫の妻の関係

- ①妻は、従順であるように。
 - *妻を愛することを人生の目標にしている夫に対する従順の要求である。
- ②夫は、キリストが教会を愛したように、妻を愛さねばならない。

(2) 親と子の関係

- ①子供は、両親への従順を通して、天の父への従順を学ぶ。
- ②親は、子供を神から委ねられた命と理解し、その子を育てなければならない。
 - *いらつかせたり、落胆させたりしてはならない。

(3) 主人と奴隷の関係

- ①奴隷 (しもべ) は、キリストに仕えるように主人に仕えなければならない。
- ②主人は、奴隷に対して正義と公平を示す。

4. 実行すべき 5 つの項目

- (1) たゆみなく祈る。
 - ①主がそれをなしてくださるのだと分かったら、祈らずにはおれなくなる。
 - ②継続した祈りによって、キリストとつながり、命と平安と確信を受ける。
- (2) 目を覚まし、感謝をもって日々を過ごす。
 - ①霊の目を開いていれば、主が働いておられるのが分かる。
 - ②主への感謝は、私たちの魂を健やかにする。
- (3) 働き人のために執りなしの祈りを捧げる。
 - ①特に、キリストの奥義(福音)を語るための機会が与えられるように。
- (4) 外部の人に対して賢明に振る舞い、機会を十分に生かす。
 - ①外部の人とは、クリスチャンでない人たちのことである。
 - ②私たちは、人々の魂を永遠に失うことを恐れなければならない。
- (5) 自分の言葉に注意を払う。
 - ①いつも親切で、塩味のきいた言葉を語るように努力する。
 - ②柔らかな言葉によって人の魂をキリストの元に連れて来る。

まとめ(1:27)

Col 1:27 この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富んだものであるか、神は聖徒たちに知らせたいと思われました。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

- (1) キリスト論に何かを付け加えたり、何かを差し引いたりしてはならない。
 - ①パウロは、神のことばを余すところなく伝えるという使命に召された。
- (2) 福音は、それまでは隠されていたが、今や明らかになった「奥義」である。
 - ①「奥義」がいかに栄光に富んだものであるかを異邦人にも知らせるために、パウロが召された。
 - ②「奥義」とは、信者の中に内住されるキリスト、「栄光の望み」である。
 - ③キリストの内に、知恵と知識の宝がすべて隠されている。
 - ④そのキリストが私たちの内に住んでおられる。
 - ⑤キリストを離れては、救いの完成はない。
 - ⑥そういう意味で、キリストは「栄光の望み」なのである。

60 分でわかる新約聖書 (13) 「テサロニケ人への手紙第一」

1. はじめに

(1) テサロニケ人への手紙第一の位置づけ

- ①著者はパウロである。このことを疑う学者はほとんどいない。
- ②パウロは、第二次伝道旅行でテサロニケを訪問し、そこに教会を設立した。
- ③ユダヤ人による迫害のために、そこを急に去ることになった。
- ④相当な量の教理を教えたが、まだ完了したわけではなかった。
- ⑤若い教会を励まし、教育するために、2 通の手紙を書いた。
- ⑥テサロニケ人への手紙第一は、携挙と再臨を体系的に扱っている。
 - * 中世の時代、携挙と再臨が語られることはほとんどなかった。
 - * 19 世紀初頭、英国のブレザレンが終末論を発展させた。
 - * その際使用したのが、2 つのテサロニケ人への手紙である。
 - * この 2 つがなければ、携挙と再臨を理解することが出来なかった。

(2) テサロニケという町

- ①マケドニア州の首都である。
- ②交通の要衝の町で、当時の人口は、約 20 万人。
- ③タルソやアテネと同じように「自由都市」であった。
 - * 自治権が与えられている。選挙で選ばれた代表による議会政治。
 - * 自分の貨幣を鑄造することができた。
 - * ローマ兵の部隊が駐留していなかった。
- ④テサロニケのユダヤ人の会堂は、大きな力を持っていた。
 - * 「神を敬う (神を恐れる) 異邦人」も多くいた。
- ⑤偶像礼拝がもたらす道徳的墮落が蔓延していた。
 - * ユダヤ教の自制心のある教えに感動する異邦人もいた。

(3) テサロニケ人への手紙第一のアウトライン

- ①あいさつ (1 : 1)
- ②個人的な内容 (1 : 2 ~ 3 : 13)
 - * どのようにして教会が誕生したか。
 - * どのようにして教会が成長したか。
 - * どのようにして教会が確立されたか。
- ③実践的教え (4 : 1 ~ 5 : 24)
 - * クリスマン生活
 - * 携挙

*再臨への備え

*教会生活

*個人的生活

④結論（5：25～28）

テサロニケ人への手紙第一の中の実践的教えについて学ぶ。

I. クリスチャン生活（4：1～12）

1. 日々の歩み（4：1～2）

1Th 4:1 最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください。

1Th 4:2 私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っています。

(1) パウロは、教理上の誤解、また实际生活の誤解を正そうとしている。

①行動の動機は、神への愛（神を喜ばせること）である。

②学びの目的は、すでに実行していることをさらに進めることである。

③パウロは、主イエスの権威によって語ったし、今も語っている。

2. 性的純潔（4：3～8）

1Th 4:3 神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることです。あなたがたが淫らな行いを避け、

1Th 4:4 一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち、

1Th 4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、

(1) テサロニケは、ギリシア・ローマの異教的文化に浸かった町。

①町には、娼婦たちもいた。

②そういう町に住んでいると、次第に罪が罪として認識されなくなる。

③パウロは、神の聖さの基準を教えている。

(2) 神がクリスチャンを召されたのは、聖潔を得させるためである。

①イエスを救い主と信じた者はみな、「聖化の歩み」へと召された。

②この教えを拒む人は、聖霊を与えてくださる神を拒んだことになる。

3. 兄弟愛（4：9～12）

1Th 4:9 兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで、

1Th 4:10 マケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、それを実行しているからです。
兄弟たち、あなたがたに勧めます。ますます豊かにそれを行いなさい。

- (1) パウロは、彼らが愛を実践していることをほめている。
 - ①彼らをほめる目的は、彼らを傲慢にするためではない。
 - ②逆に、彼らが愛においてますます成長するためである。
- (2) テサロニケ教会には、労働を軽視する人たちがいた。
 - ①それは、主イエスの再臨について誤解があったからである。
 - ②パウロは、「落ち着いた生活をするように」と命じた。
 - ③パウロは、過剰な再臨信仰や他者へのお節介に対して警告を発した。
 - ④喜びに満ちた状態と、過熱した状態とは、別ものである。
 - ⑤信者は、働くことで生活の糧を得、神に栄光を帰す。
 - ⑥これ自体が、教会外の人たちへの証しとなる。

II. 携挙（4：13～18）

1. テーマの紹介（4：13）

1Th 4:13 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。

- (1) テサロニケの信者の教理的弱点：携挙のテーマが紹介される。
 - ①パウロがテサロニケを去ってから、死んだ者たちが何人か出てきた。
 - ②「眠っている人たち」とは、死の婉曲的な表現である（信者にのみ使用する）。
 - * 肉体の眠りであって、魂の眠りではない。
 - ③死んだ者たちは、携挙の際にはその祝福に与ることができないのか。
 - ④携挙（空中再臨）とは、信者が生きたまま天に上げられることを指す。

2. 復活の希望（4：14～15）

1Th 4:14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。

1Th 4:15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。

- (1) 信者は、望みのない不信者のように悲しむ必要はない。
 - ①イエスは死んで復活された。
 - ②イエスにあって死んだ者には、復活の希望が与えられている。
 - ③携挙の時には、死んだ者は甦り、天に上げられる。
 - ④生きている者が、死んだ者に優先するようなことは決してない。

3. 携挙の預言（4：16～18）

1Th 4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

1Th 4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

1Th 4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

(1) 主イエスご自身が天から下って来られる。

①主イエスは、今は父なる神の右の座に座しておられる。

(2) 携挙の様子

①号令がかかる。これは、軍隊用語で、サタンとの最後の戦いを暗示させる。

②御使いのかしらの声が響く。これは、天使ミカエルのことである。

③神のラッパが鳴り響く。

④キリストにある死者が先ず甦る。

*「キリストにある死者」とは、教会時代の聖徒たちである。

*旧約時代の聖徒たちは、患難期の終わりに甦る（ダニ 12：2）。

⑤次に、生き残っている者が、瞬時に携挙される。

(3) 私たちは、いつまでも主とともにいることになる。

①パウロは、自分が生存している間に携挙がある可能性を排除していない。

②携挙された聖徒たちは、主イエスが整えた場所に行く（ヨハ 14：2～3）。

③この教理の適用は、慰めである。

④携挙や再臨の希望を語らないキリスト教は、聖書的キリスト教ではない。

Ⅲ. 再臨への備え（5：1～11）

1. 主の日（5：1～5）

1Th 5:1 兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。

1Th 5:2 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。

1Th 5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。

(1) 携挙について語ったパウロは、次に主の日について解説している。

①「主の日」とは、旧約聖書でよく使われる言葉で、神の裁きの日を指す。

②新約時代に生きる私たちはこれを、大患難時代（患難期）と呼んでいる。

③大患難時代がいつ来るかは誰にも分からない。

④世の終わりを予告する人がいるなら、その人の教えは聖書的とは言えない。

(2) パウロは、信者と未信者とを対比させている。

- ①信者は、大患難時代を通過しない。
- ②未信者は暗闇の中にいるので、主の日は盗人のように彼らを襲う。
- ③信者の希望は、大患難時代を通過しなくてもよいということにある。

2. 慎み深い歩み（5：6～11）

1Th 5:6 **ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。**

1Th 5:7 **眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。**

(1) 未信者は眠っている。

- ①霊的な目が開かれておらず、夢を見ているか、酔ったような状態にある。

(2) 信者は「光の子ども」となった。

- ①この世の人たちのような生き方をしなくなった。
- ②眠っていないで、目を覚まして、慎み深くしているように。
 - *不道徳の中で生活しないように。
- ③信仰と愛を胸当てとして着けるように。
 - *これは、闇の力と戦うためである。
- ④救いの望みをかぶととしてかぶるように。
 - *文脈では、大患難時代から救われるという希望。
 - *その希望は、敵の攻撃や誘惑に勝利する力となる。

(3) 「目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きるようになるためです」

- ①目ざめているとは、霊的に健全な状態。
- ②眠っているとは、霊的に無関心な状態。
- ③つまり、霊的に無関心の人でも、真に救われているなら携挙される。
- ④ただし、信者としての報酬は両者で異なる。
- ⑤一度救われた人が、救いを失うことはない。

IV. 教会生活（5：16～15）

1. 指導者への態度（5：12～13）

1Th 5:12 **兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、**

1Th 5:13 **その働きのゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。また、お互いに平和を保ちなさい。**

(1) パウロはテサロニケの信者に、指導者を尊敬するようにと願っている。

①その前提に、霊的指導者は忠実に主の働きをしているという理解がある。

②彼らの忠実な働きによって、再臨を待ち望む信仰が育まれる。

2. 互いに対する責任（5：14～15）

1Th 5:14 兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。

1Th 5:15 だれも、悪に対して悪を返さないように気をつけ、互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うように努めなさい。

(1) 教会生活は、お互いに責任を持ち合う共同体生活、家族生活である。

①責任を指導者に委ねるのではなく、互いに重荷を負い合うべきである。

②気ままな者を戒める。

*「気ままな者」とは、仕事にも就かずに、怠惰な生活を送っている者。

③小心な者を励ます。

*「小心な者」とは、愛する者を失くした悲しみから立ち直れない者。

*この世の迫害や誘惑に負けてしまう者など。

④弱い者を助ける。

*「弱い者」とは、信仰や聖書理解が弱い者。

⑤復讐するのではなく、いつも善を行なうように励むこと。

V. 個人的生活（5：16～24）

1. 3つの勧告

1Th 5:16 いつも喜んでいなさい。

1Th 5:17 絶えず祈りなさい。

1Th 5:18 すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1) いつも喜んでいなさい。

①この喜びは、キリストにある喜び、御霊による喜びである。

②この喜びは、この世の人たちが味わう喜びとは根本的に異なる。

③罪赦されたという確信から来る喜び。

④永遠の命の希望があるという喜び。

⑤再臨の主イエスに会うことができるという喜び。

⑥一時的なものではなく、いつまでも続く喜び。

(2) 絶えず祈りなさい。

①常に神に信頼する姿勢を教えたもの。

- ②何をするにも神の助けを求めるという習慣を育てるように、教えたもの。
- ③神の恵みがなければ、主の働きは何一つできないことを覚える。

(3) すべての事について、感謝しなさい。

- ①これは、不幸や悲劇をも感謝せよという意味ではない。
- ②感謝する対象は、神である。
- ③すべてを益に変えてくださると信じるがゆえに、感謝することができる。

2. 共同体としての生活（5：19～22）

1Th 5:19 **御霊を消してはいけません。**

1Th 5:20 **預言を軽んじてはいけません。**

1Th 5:21 **ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。**

1Th 5:22 **あらゆる形の悪から離れなさい。**

(1) 御霊を消してはならない。

- ①御霊は、「火」としてイメージされている。
- ②御霊の働きは、肉的な思いや不信仰によって消されていく。

(2) 預言をないがしろにしてはいけない。

- ①新約聖書が完結するまでは、預言の賜物の行使が必要であった。
- ②新約聖書の完成とともに、預言の賜物はなくなった。
- ③この書簡の時代は、預言の賜物が行使されていた。
- ④テサロニケの教会では、その重要性が認識されていなかった。
- ⑤現代でも、啓示されたみことば以上に、人間の教えが重視されることがある。

(3) すべてのことを見分ける。

- ①預言の賜物を行使する人が現われた場合、それを見分ける必要がある。
- ②見分けた結果、それが聖書の教えと合致するなら、それを堅く守る必要がある。
- ③御霊の賜物は、無視するのも、無批判に受け入れるのも間違いである。

(4) 悪はどんな悪でも避ける。

- ①悪い預言だけでなく、すべての悪を避けるということ。
- ②ここには、誤った教理も含まれる。

3. 超自然的助け（5：23～24）

1Th 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。
あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のとき
に、責められるところのないものとして保たれていますように。

(1) パウロは、テサロニケのクリスチャンたちのために祈っている。

- ①彼らの聖化が完成するように。
- ②そのことを為してくださるのは、「平和の神ご自身」である。
- ③「あなたがたの霊、たましい、からだに完全に守られますように」
- ④人間が 3 つの構成要素から成っていることを教えているのではない。
- ⑤人間存在のすべてが守られるようにという祈りである。

(2) 私たちをこの世から召し出された神は真実なお方である。

- ①約束されたこと（救いの完成、聖化の完成）を必ず成し遂げてくださる。
- ②私たちの救いの確かさは、真実な神にかかっている。

60分でわかる新約聖書（14） 「テサロニケ人への手紙第二」

1. はじめに

(1) テサロニケ人への手紙第一と第二の位置づけ

- ①著者はパウロである。このことを疑う学者はほとんどいない。
- ②パウロは、第二次伝道旅行でテサロニケを訪問し、そこに教会を設立した。
- ③ユダヤ人による迫害のために、そこを急に去ることになった。
 - *テサロニケは、マケドニア州の首都で、当時の人口は約20万人。
 - *テサロニケのユダヤ人の会堂は、大きな力を持っていた。
 - *「神を敬う（神を恐れる）異邦人」も多くいた。
 - *偶像礼拝がもたらす道徳的墮落が蔓延していた。
- ④パウロは、相当な量の教理を教えていたが、まだ完了したわけではなかった。
- ⑤迫害の中にある教会を励ますために、第一の手紙を書いた。
 - *第一の手紙は、携挙と再臨を体系的に扱っている。
 - *コリントにいた時に書いた。
- ⑥テサロニケ人への手紙第二は、約1年後に書かれたと思われる。
 - *第一の手紙を届けが人が、テサロニケ教会の情報を持ち帰った。
 - *その中には、よい情報と悪い情報が含まれていた。
- ⑦そこでパウロは、第二の手紙を執筆する必要性を覚えた。
 - *これもまた、コリントで書いた。

(2) 執筆目的

- ①励まし：聖徒たちは迫害の中にあった。
- ②正しい教理：聖徒たちは終末論に関して混乱していた。
- ③教理の適用：無責任な生き方をする者たちがいた。

(3) メッセージのアウトライン

- ①迫害に遭っている人たちへの励まし（1：1～12）
- ②終末に関する神の計画（2：1～12）
- ③実践的教え（2：13～3：18）

テサロニケ人への手紙第二について学ぶ。

I. 迫害に遭っている人たちへの励まし（1：1～12）

1. 感謝の言葉（3～4節）

2Th 1:3 兄弟たち。あなたがたについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。それは当然のことです。あなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがたすべての間で、一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっているからです。

2Th 1:4 ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。

(1) 感謝する理由

- ①彼らの信仰が目に見えて成長している。
- ②彼らの間で、お互いに対する愛が増し加わっている。
- ③彼らは、迫害と患難とに耐えながら、その従順と信仰とを保っている。

(2) 彼らの信仰の姿勢は、諸教会の中にあつて良き手本となっている。

- ①テサロニケ教会の開拓者であるパウロは、そのことを誇りとしている。
- ②迫害はかえって信仰を育てる機会となった。

2. 迫害が起こる理由（5～7節）

2Th 1:5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

2Th 1:6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、

2Th 1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。

(1) クリスチャンが迫害に遭う理由

- ①神の国は、キリストの初臨によってすでに到来している。
- ②それが完全な姿で私たちの前に現われるのは、再臨のときである。
- ③私たちは今、過去（神の国はすでに現われた）と未来（神の国はこれから完成する）の間の時間を生きている。
- ④信者に迫害が襲ってくる理由は、究極的な救いへの途上にあるからである。
- ⑤迫害によって信仰が試された者には、やがて報いとして安息が与えられる。
- ⑥その安息とは、神の臨在の中で永遠に憩うことができるというものである。

(2) 福音に敵対したり、信者を迫害したりする者には、神の正しい裁きが下る。

- ①その逆転劇は、主イエスが再臨されるときに起こる。
- ②永遠の刑罰は厳粛な事実であり、誰もが真剣に考えるべきテーマである。

(3) 再臨のキリストは、信じたすべての人によってあがめられるようになる。

- ①もしこのような逆転劇がないなら、迫害に耐える力は湧いて来ない。
- ②初期のクリスチャンたちは、再臨を日々意識しながら生きていたのである。

Ⅱ．終末に関する神の計画（2：1～12）

1．教理的誤解を解く（1～2 節）

2Th 2:1 さて兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いします。

2Th 2:2 霊によってであれ、ことばによってであれ、私たちから出たかのような手紙によってであれ、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。

(1) 再臨に関して誤った教えを広める人たちがいた。

- ①パウロは第一の手紙で、再臨は起こるが、いつかは分からないと書いていた。
- ②ところが、ある人たちは「主の日」がすでに来たかのように教えていた。
 - * 「主の日」とは、キリストの再臨の日である。
 - * 「主の日」の始まりが、患難時代である。
- ③そのため、動揺する人たちが出ている。
 - * もし「主の日」がすでに来ているなら、「携挙」から漏れたことになる。
 - * もしそれが本当なら、信者にとっては耐え難い悲しみである。

(2) パウロは、その教えを完全に否定し、信徒たちの動揺を静めようとした。

- ①「携挙」はまだ起こっていないから、安心せよということである。
- ②携挙とは、いわゆる空中再臨のことで、信者はそのまま天に挙げられる。
 - * キリストにあって死んだ者には、復活の希望が与えられている。
 - * 携挙のときには、死んだ者は甦り、天に挙げられる。
 - * 生きている者が、死んだ者に優先するようなことは決してない。

2．主の日が来る前の兆候（3～4 節）

2Th 2:3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。

2Th 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。

(1) 再臨に先立ち、まず背教が起こる。

- ①背教とは、基本的には神への反逆である（政治的、宗教的反乱を含む）。

(2) 次に、不法の人が現われる。

①不法の人とは、「滅びの子」「破滅に定められた者」を意味する。

*つまり、「反キリスト」のことである。

②彼は、神殿の中で自分を高く上げ、自分を神として礼拝するように要求する。

*黙 13 章の「獣」の活動参照

(3) 今は、不法の人の現われを引き止めているものがある。

①「引き止めているもの」とは、教会の存在である。

②教会に内住する聖霊の存在である。

③引き止めているものがなくなると、不法の人は本性を現わすようになる。

④そして、この世は患難時代に突入する。

⑤神が支配しておられるので、悪は神の許容範囲でしか働くことができない。

3. 反キリストの出現 (8～10 節)

2Th 2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。

2Th 2:9 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、

2Th 2:10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。

(1) 引き止めているものが取り除かれると、不法の人が現われる。

①不法の人とは、反キリストのことである。

②その時から、患難時代に突入する。

③不法の人が支配する期間は、7 年間である。

*後半の 3 年半は、特に厳しい試練が訪れる。

(2) 不法の人の到来は、サタンの働きによるものである。

①不法の人（反キリスト）は、その権威と力をサタンから受ける。

②超自然的な業（偽りの力、しるし、不思議）で人々を欺く。

③欺かれるのは、滅びる人たちである。

④彼らが滅びる理由は、救いとなる真理を愛そうとしなかったからである。

(3) しかし、反キリストは再臨のキリストによって滅ぼされる。

①これは、患難時代の最後に起こることである（イザ 11:4 参照）。

②黙示 19 章では、神の敵が白い馬に乗った方の口から出る鋭い剣によって滅ぼされると預言されている。

Ⅲ. 実践的教え（2：13～3：18）

1. 怠惰な者への勧告（10～12節）

2Th 3:10 あなたがたのところにいたとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。

2Th 3:11 ところが、あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいると聞いています。

2Th 3:12 そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。

（1）第一の手紙での勧告

- ①落ち着いた生活をすることを志し、自分の手で働くように。
- ②そうすれば、外の人々に対しても立派に振る舞うことができる。
- ③また乏しいことがないようにするためである。
- ④ところが、その勧告に従わない人たちが依然としていた。

（2）第二の手紙での勧告

- ①怠惰な歩みをしている人とは、働くことができるのにそうしない人である。
- ②彼らは、怠惰な生活することによってまじめに働く人々を利用していた。
- ③また、教会内に悪い影響を与えていた。
- ④彼らは、キリストの再臨が近いから働く意味がないと考えていた。
- ⑤もちろん、これはパウロの教えに反することであった。
- ⑥ついにパウロは、そういう者とは離れていなさいと勧める。
- ⑦ただし、必要を覚えている兄弟たちへの愛と配慮を怠ってはならない。

2. 終わりのあいさつ（16節）

Th 3:16 どうか、平和の主ご自身が、どんな時にも、どんな場合にも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてとともにいてくださいますように。

（1）パウロは、祈りをもってこの手紙を終える。

- ①平和の主が、どんな場合にも、平和を与えてくださるように。
- ②主がすべての信者とともにいてくださるように。

（2）以上の2つは、私たちの願いであり、確信でもある。

- ①私たちに肉体の健康と魂の平和を与えてくれるのは、聖書の神だけである。

まとめ

1. 携挙

- (1) キリストの空中再臨である。
- (2) なんの前触れもなく起こる。
- (3) 普遍的教会は天に上げられる。
 - ①キリストにある死者が先ず復活して天に上げられる。
 - ②生きている聖徒たちが天に上げられる。

2. 主の日

- (1) 「主の日」とは、キリストの再臨の日である。
 - ①「主の日」の始まりが、患難時代である。
- (2) 出来事の順番
 - ①先ず背教が起こる。
 - ②次に不法の者が現れる。
 - ③そこから患難時代が始まる。
 - ④7年後にキリストの再臨が起こる。
 - ⑤キリストは地上に千年王国を建てる。

60 分でわかる新約聖書（15） 「テモテへの手紙第一」

1. はじめに

(1) テモテへの手紙第一の位置づけ

- ①2 通のテモテへの手紙とテトスへの手紙を総称して、「牧会書簡」と言う。
- ②パウロは、牧会上の問題を取り上げ、指導者に指示や助言を与えている。
- ③牧会書簡は個人に宛てられたものだが、公に朗読すべきものでもある。

(2) テモテへの手紙第一の執筆経緯

- ①使徒の働きは、ローマの獄中でのパウロの伝道で終わっている。
- ②パウロの晩年に関して、多くの学者は以下のように考えている。
 - *2 年後、パウロは獄舎から解放され、ローマ退去を命じられた。
 - *パウロは、ルカとテモテを伴ってエペソを訪問した。
 - *エペソでは、パウロが予期した通りのことが起こっていた。
 - *1 テモテの中に書かれた警告は、グノーシス主義に関するものであろう。
 - ・パウロは、コロサイ人への手紙でこのテーマを取り上げていた。
 - *パウロは、エペソでの奉仕を短期間で終え、次にピリピに行った。
 - *エペソ教会を牧するために、テモテを後に残した。
 - *パウロは、すぐにエペソに戻るつもりでいた（1 テモ 3 : 14）。
 - *しかし、エペソ教会の状況は、早急な対応を必要としていた。
 - *そこでパウロは、テモテを励ますために、この手紙を書いた。

(3) 執筆目的

- ①大都市の大教会を牧する若い伝道者を励ますこと
- ②偽教師の教えに対抗する方法を教えること
- ③教会内の種々の問題に対する対応策を指示すること

(4) メッセージのアウトライン

- ①若い牧師への助言
- ②偽教師の扱い
- ③教会の指導者の資格
- ④自らの霊的養い
- ⑤禁欲的生活からの解放
- ⑥教会内の人間関係

テモテへの手紙第一について学ぶ。

I. 若い牧師への助言

1. 1 テモ 1 : 3～5

1Ti 1:3 私がマケドニアに行くときに言ったように、あなたはエペソにとどまり、ある人たちが違った教えを説いたり、

1Ti 1:4 果てしない作り話と系図に心を寄せたりしないように命じなさい。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、神に委ねられた信仰の務めを実現させることにはなりません。

1Ti 1:5 この命令が目指す目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛です。

(1) 偽教師がやって来て、「**違った教え**」を説くようになる。

①彼らは、「**果てしない作り話**」や「**系図**」に関心を向けさせるであろう。

＊「**果てしない作り話**」は、グノーシス主義の教えであろう。

＊「**系図**」は、ユダヤ人たちが自分はどの部族出身か、また祭司、レビ人になる資格があるかどうか、などを論じる際に使ったものである。

②そのようなものは議論を巻き起こすだけで、霊的にはなんの価値もない。

③無益な議論に巻き込まれると、最も重要なことが見えなくなる。

(2) パウロは、「**この命令**」（聖書の教え）が何を目的としているか再確認する。

①信仰の最終目的は、「愛」である。

②偽教師たちは、目標を見失い、わき道に迷い込み、無益な議論を重ねている。

③目標は、「神を愛し、隣人を愛し、キリストの似姿に変えられていくこと」。

④ガラ 5 : 14

Gal 5:14 律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるのです。

II. 偽教師の扱い

1. 1 テモ 4 : 12～13

1Ti 4:12 あなたは、年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。むしろ、ことば、態度、愛、信仰、純潔において信者の模範となりなさい。

1Ti 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。

(1) 年が若いからといって、だれからも軽く見られないようにする。

①年のせいで、教えや命令まで軽く見られるようなことが起こらないように。

②当時は、40 歳前だと若いと思われた。

③当時のテモテは、30 代後半から 40 代前半になっていたと思われる。

- (2) 行動を通して、他の信者に見本を示す。
 - ①論争によってではなく、実際の行動によって背教者たちを黙らせる。
 - ②具体的には、愛、信仰、純潔の 3 点に気をつける。
- (3) 聖書の朗読と解き明かしに専念する。
 - ①テモテは、エペソ教会に派遣された使徒職の代理人である。
 - ②聖書の朗読と解き明かしこそ、牧師の第一義的使命である。
 - ③それが実行できないような状況にあるなら、直ちに改める必要がある。

Ⅲ. 教会の指導者の資格

1. 1 テモ 3 : 2～4

1Ti 3:2 ですから監督は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、自分を制し、
慎み深く、礼儀正しく、よくもてなし、教える能力があり、

1Ti 3:3 酒飲みでなく、乱暴でなく、柔和で、争わず、金銭に無欲で、

1Ti 3:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人でなければ
なりません。

- (1) 監督になる資格
 - ①紀元 1 世紀の「監督」は、今日の牧師のような存在である。
 - ②誰もが霊的指導者になれるわけではない。
 - ③そのためには、自制し、霊的に成長しなければならない。
 - ④教会の成長と健全性とは、監督の資質に依存している。
- (2) パウロは、監督になるための 15 の実際的な資格を挙げている。
 - ①個人的に非難されるところがない。
 - ②一人の妻の夫である。
 - *結婚関係に忠実である。
 - *独身でもかまわないと思われる。
 - ③自分を制することができる。
 - ④慎み深い。
 - ⑤礼儀正しい。
 - ⑥旅人をよくもてなす。
 - ⑦教える能力がある。
 - ⑧酒飲みでない。
 - ⑨乱暴でない。

- ⑩柔和である。
- ⑪争わない。
- ⑫金銭に無欲である。
- ⑬自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている。
- ⑭信者になったばかりの人でない。
- ⑮教会の外の人々にも評判の良い人である。

＊パウロは宣教という視点から、監督職を考えていた。

IV. 自らの霊的養い

1. 1 テモ 4 : 14～16

1Ti 4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。

1Ti 4:15 これらのことに心を砕き、ひたすら励みなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。

1Ti 4:16 自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。

- (1) 内に与えられた聖霊の賜物を生かす。
 - ①霊的な奉仕のためには、聖霊の賜物が必要である。
 - ②按手を受けた時、預言によって、聖霊の賜物が与えられていることを知った。
 - ③パウロは、「あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません」と命じた。
- (2) 自らの務めに対して、全力で取り組む。
 - ①そうすれば、だれの目にも進歩が明らかになる。
- (3) 自分自身にも、教えることにも、よく気をつける。
 - ①公の働きと、私的生活に気をつける。
- (4) 以上のことをあくまでも継続する。
 - ①その使命は、余りにも重大である。
 - ②自分自身と他の人々の永遠の運命が、その成否にかかっている。

V. 禁欲的生活からの解放

1. 1 テモ 4 : 7～8

1Ti 4:7 俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。

1Ti 4:8 肉体の鍛錬も少しは有益ですが、今のいのちと来たるべきいのちを約束する敬虔は、すべてに有益です。

(1) 敬虔のために自己鍛錬をする。

- ①肉体の鍛錬（禁欲主義）ではなく、信仰の成長を促す霊的鍛錬である。
- ②鍛錬によって得られた敬虔は、今の命と未来の命を保証するものとなる。
- ③クリスチャン生活を送るための力は、救いの完成への希望にある。

2. 1 テモ 5 : 23

1Ti 5:23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いなさい。

(1) 健康のために、少量のぶどう酒を飲むこと。

- ①「大酒飲み」と非難されることを恐れ、水ばかり飲んでいたのであろう。
- ②テモテは、「自らの身に課した律法」に束縛されていたのであろう。
- ③このぶどう酒は、治療目的のためのものである。
- ④善であれ悪であれ、いつか必ず光のもとに出される。

*神を恐れかしこみつつ歩むのが知恵である。

VI. 教会内の人間関係

1. 1 テモ 5 : 1～3

1Ti 5:1 年配の男の人を叱ってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人には兄弟に対するように、

1Ti 5:2 年配の女の人には母親に対するように、若い女の人には姉妹に対するように、真に純粋な心で勧めなさい。

1Ti 5:3 やもめの中の本当のやもめを大事にしなさい。

(1) 年寄りに対して

- ①奉仕の大前提は、クリスチャンは神の家族だという認識である。
- ②年老いた男性に対しては、父親と考えるべきである。
 - *老人には、父親に対するように教え、勧め、戒めなければならない。
 - *年寄りは、叱られることを極度に恐れる。
- ③年老いた女性に対しては、母親と考えるべきである。

(2) 若者に対して

- ①若い男性に対しては、すべて兄弟と考えて接すべきである。

* 肉の兄弟に対するように、間違いは矯正し、良い点はほめる。

* お互いのことを、対等な関係にあると認識する。

②若い女性に対しては、すべて実の姉妹と考えて接すべきである。

* 「真に純粋な心で勧めなさい」

* 不純な動機からではなく、相手の最善を考えて行動する。

(3) やもめに対して

①古代社会では、やもめは社会的弱者であった。

②やもめを取り扱う際の原則

* 本当のやもめは、敬われるべき存在である。

* やもめに家族（子供か孫）がいる場合、その家族が率先して援助する。

③教会の名簿にやもめとして登録するための条件が、いくつかある。

* 60 歳以上の身寄りのない婦人

* ひとりの夫の妻であった人

* 良い行ないによって認められている人

・ 子供を立派に育てた人（家庭内での善行）

・ 旅人をもてなした人（共同体内での善行）

・ 聖徒の足を洗った人（謙遜な奉仕）

・ 困っている人を助けた人（弱者への奉仕）

・ すべての良いわざに務め励んだ人（信仰の表現）

* 若いやもめは、名簿に載せるべきではない。

結論：1 テモ 3：14～16

1Ti 3:14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながら、これらのことを書いています。

1Ti 3:15 たとえ遅くなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたに知っておいてもらうためです。神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。

1Ti 3:16 だれもが認めるように、この敬虔の奥義は偉大です。／「キリストは肉において現れ、／霊において義とされ、／御使いたちに見られ、／諸国の民の間で宣べ伝えられ、／世界中で信じられ、／栄光のうちに上げられた。」

(1) 教会の本質

①パウロはテモテに、教会でいかに振る舞うべきかを教えた。

②「神の家」とは「生ける神の教会」のことである。

③教会は、「真理の柱と土台」と呼ばれている。

④当然、教会にしか果たせない役割がある。

(2) 教会の役割

①「**敬虔の奥義**」（啓示された真理）を伝える責任と特権が与えられている。

②伝える内容は3つある。

＊キリストは肉において現われた（受肉の真理）。

＊キリストの罪なき生涯、十字架の死、復活、昇天

＊キリストを信じる信仰の必要性

③キリストは今栄光の座にあって、信者のために執りなしをしておられる。

④その結果、キリストの福音は諸国民の間で宣言され、世界中で信じられるようになった。

60 分でわかる新約聖書（16） 「テモテへの手紙第二」

1. はじめに

(1) テモテへの手紙第二の位置づけ

- ①2 通のテモテへの手紙とテトスへの手紙を総称して、「牧会書簡」と言う。
- ②パウロは、牧会上の問題を取り上げ、指導者に指示や助言を与えている。
- ③牧会書簡は個人に宛てられたものだが、公に朗読すべきものでもある。

(2) テモテへの手紙第二の執筆経緯

- ①2 テモテは、獄中で書かれた。
- ②パウロはローマで 2 度目の獄中生活を送っていた。
 - *1 度目の獄中生活とは、環境が大いに異なる。
 - *年を重ね、疲れ切ったパウロが、暗い獄舎に閉じ込められていた。
 - *伝承では、ここは、マメルティヌスの牢獄と言われている。
- ③この直後に、パウロは斬首刑に処された。
- ④2 テモは、13 あるパウロ書簡の最後のものである。
- ⑤紀元 67 年頃に書かれた。
 - *テトスへの手紙の後に書かれた。

(3) 執筆目的

- ①奮闘しているテモテを励ますために書いた手紙である。
- ②テモテに宛てて書いた別離の手紙でもある。

(4) メッセージのアウトライン

- ①牧会に関する勧告（1：1～2：13）
- ②偽教師に関する勧告（2：14～26）
- ③終わりの時代に関する勧告（3：1～17）
- ④個人的務めに関する勧告（4：1～22）

テモテへの手紙第二について学ぶ。

I. 牧会に関する勧告（1：1～2：13）

1. 1：6～7

2Ti 1:6 そういふわけで、私はあなたに思い起こしてほしいのです。私の按手によってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。

2Ti 1:7 神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。

(1) 牧師として取るべき態度

- ①新しいことを求めるよりも、与えられている神の賜物を燃え立たせる。
- ②その賜物は、按手の際に確認されたものである。
- ③神が私たちを何かの奉仕に召された場合、必要な賜物も与えてくださる。

(2) 神は私たちに、力と愛と慎みの霊を与えてくださる。

①力の霊

- * 聖霊の助けによって、内なる人を強くしていただくことができる。
- * 私たちは、聖霊の力によって戦うことを学ばねばならない。

②愛の霊

- * 神への愛と隣人への愛がなければ、福音の使者とはなれない。
- * その愛は、自力で作出すものではなく、聖霊によって与えられる。

③慎みの霊

- * 聖霊は、力と愛が神からの賜物であることを教えてくれる。
- * 聖霊に導かれるなら、傲慢にならず、知恵ある判断ができるようになる。

3. 1:11～12

2Ti 1:11 この福音のために、私は宣教者、使徒、また教師として任命されました。

2Ti 1:12 そのために、私はこのような苦しみにあっています。しかし、それを恥とは思っていません。なぜなら、私は自分が信じてきた方をよく知っており、また、その方は私がお任せしたものを、かの日まで守ることがおできになると確信しているからです。

(1) 苦難が来るのは、不思議なことではない。

- ①イエス・キリストに倣う者とされた。

(2) 苦難に打ち勝つための確信が3つある。

- ①福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのだという確信。
- ②福音のために苦しみに会っているが、それは恥ではないという確信。
 - * 主イエスは真実なお方なので、苦しみは必ず善に変えられる。
- ③自分がお任せしたものを、かの日のために守ってくださるという確信。
 - * 「私がお任せしたもの」とは、自分の魂と信者の魂である。
 - * 「かの日」とは、裁きの日のことである。

4. 2:1～2

2Ti 2:1 ですから、私の子よ、キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

2Ti 2:2 多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。

(1) テモテの働きの目標は、「信者の弟子化」にある。

- ①パウロが第一世代であり、テモテが第二世代である。
- ②テモテが教える信頼できる人たちは、第三世代である。
- ③第三世代が教えるほかの人たちは、第四世代である。

(2) 福音が正確に伝わったのは、弟子たちの「鎖」がつながっていたからである。

- ①伝道とは、第四世代の信者が育つことを目標に行なうものである。

II. 偽教師に関する勧告(2:14~26)

1. 2:15

2Ti 2:15 あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。

(1) 偽教師たちが偽の教えを言い広め、クリスチャンたちを惑わしていた。

- ①大多数の人たちが真理から逸れていく中で、いかに生きるべきか。
- ②多数派の意見に流されることは、赦されない。

(2) 俗悪なむだ話を避ける。

- ①張本人は、ヒメナイとピレトである。
- ②「私は、彼ら(ヒメナイとアレクサンドロ)をサタンに引き渡しました」(1テモ1:20)。
- ③復活がすでに起こったかのような教えが言い広められていた。
- ④つまり、復活とは内的、霊的なものであるとの主張がなされていた。
- ⑤もしそれが本当なら、再臨の時には、からだのよみがえりはない。
- ⑥その教えの悪影響を受けた人たちは、真理から外れ、信仰を失ってしまった。
- ⑦単純な聖書の真理を、言葉の議論によって複雑にできてしまっていた。

(3) パウロはテモテに、慰めの言葉を書き送った。

- ①救いに選ばれた人が信仰をなくすことはあり得ない。
- ②神の堅固な土台には、「主はご自分に属する者を知っておられる」とある。
- ③それゆえ、主の御名を呼ぶ者は誰でも不義を離れるべきである。

2. 2:20~21

2Ti 2:20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用いられます。

2Ti 2:21 ですから、だれでもこれらのことから離れて自分自身をきよめるなら、その人は尊いことに用いられる器となります。すなわち、聖なるものとされ、主人にとって役に立つもの、あらゆる良い働きに備えられたものとなるのです。

(1) 不義を離れるべきだということを、器のたとえを用いて解説している。

①大きな家（教会）には、さまざまな器（教会の構成員）がある。

②尊いことに用いられる金や銀の器

③卑しいことに用いられる木や土の器

*卑しい器とは、偽教師のことである。

④尊い器になりたいと思うなら、偽教師との交わりを離れ、聖別された者としての歩みを始めなければならない。

(2) 「若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい」

①「若いときの情欲」とは、肉的な欲望だけではない。

②自我の強さ、論争好きな性質、性急な判断、野心などもこの中に含まれる。

Ⅲ. 終わりの時代に関する勧告 (3:1~17)

1. 3:1

2Ti 3:1 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。

(1) 終わりの時代（終末時代）になると、大規模な背教が起こる。

①それは、この世を混乱させるだけでなく、教会を破壊するほどの動きとなる。

②その原因となるのが、偽教師の存在である。

③背教者の特徴が、20 項目にわたって列挙されている (3:2~5)。

(2) 背教者との交わりを断つ。

①特に名指しで指摘されているのが、「愚かな女たち」である。

*偽の教えに影響されやすい幼稚な女性たち

②偽教師たちは、出エジプト記でモーセに敵対した呪術師のようである。

*ヤンネとヤンブレという名が上げられている。

③偽教師たちの欺瞞性は、いずれすべての人にはっきり分かるようになる。

④背教に対する最大の武器は、交わりを絶つことである。

2. 3:12

2Ti 3:12 キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

(1) パウロの宣教活動には、最初から苦難と迫害が伴っていた。

①しかし、「主はそのすべてから私を救い出してくださいました」と語る。

(2) 信仰者が迫害に会うことは、新約聖書の真理である。

①この言葉は、クリスチャンの目を覚まさせるものである。

②今でも世界の多くの国々では、クリスチャンに対する迫害が起こっている。

3. 3:16

2Ti 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

(1) パウロの教えの確かさは、その源である「聖書」に基づいている。

①聖書は、人に知恵を与え、信仰による救いを受けさせることができる。

②聖書はすべて、「神の靈感(神のいぶき)」によって書かれたものである。

③それゆえ、「**教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益**」である。

(2) 聖書に対してどのような態度を取るかによって、その人の信仰が決まる。

①聖書を離れては、私たちは何一つ有益なことをすることができない。

IV. 個人的務めに関する勧告(4:1~22)

1. 4:2

2Ti 4:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

(1) テモテに対するパウロの言葉には、遺言のような重みと厳粛さがある。

①神から啓示された福音を伝えることが、伝道者の第一義的使命である。

②どのような状況に置かれていようとも、その使命は変わらない。

③時が良くても悪くても、みことばを宣べ伝える。

(2) みことばを宣べ伝える理由が2つある。

①「**キリストのさばきの座**」において働きが吟味される時が来る。

*その日は、忠実な者には喜びの日、不忠実な者には悲しみの日となる。

②**信仰者が真理から離れる時代**が来る。

*健全な教えよりも自分に都合のいいことを聞きたがるようになる。

*真理を語る教師よりも、思い通りになる教師を寄せ集めるようになる。

2. 4:6~8

2Ti 4:6 私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。

2Ti 4:7 私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

2Ti 4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

(1) 死を目前に控え、自らの生涯を振り返った証しを、テモテに書き送っている。

①パウロは、自分の命は注ぎの供え物となると語っている。

＊殉教者として「血を流す」であろうという預言である。

②「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」

(2) パウロの望みは、正しい審判者の前に立って、義の栄冠をいただくこと。

①義の栄冠は、「主の現われを慕っている者には、だれにでも」与えられる。

(3) 私たちは、どのような言葉を語りながら死んでいくのだろうか。

①パウロのように、感謝と希望の言葉を語れる人は幸いである。

②もしその自信がないなら、何が不足しているか黙想してみよう。

60 分でわかる新約聖書（17） 「テトスへの手紙」

1. はじめに

(1) テトスへの手紙の位置づけ

- ① 2 通のテモテへの手紙とテトスへの手紙を総称して、「牧会書簡」と言う。
- ② パウロは、牧会上の問題を取り上げ、指導者に指示や助言を与えている。
- ③ 牧会書簡は個人に宛てられたものだが、公に朗読すべきものでもある。

(2) テトスは、パウロの同労者である。

① 2 コリ 8 : 23

2Co 8:23 テトスについて言えば、彼は私の仲間であり、あなたがたのために働く同労者です。私たちの兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の使者であり、キリストの栄光です。

② 使徒の働きには彼の名前が出て来ない。

③ パウロの 4 つの手紙（2 コリ、ガラ、2 テモ、テトス）に出て来る。

2. アウトライン

- (1) 執筆の経緯と目的
- (2) テトスの略歴
- (3) 中心聖句

テトスへの手紙から教訓を学ぶ。

I. 執筆の経緯と目的

1. テモテへの手紙第一の執筆後、マケドニアのどこかで書いた。

- (1) 紀元 63～66 年頃
- (2) 執筆の経緯は、テト 1 : 5 を見れば分かる。

Tit 1:5 私があなたをクレタに残したのは、残っている仕事の整理をし、私が命じたとおりに町ごとに長老たちを任命するためでした。

- ① パウロは、クレタ島の教会を牧するためにテトスを残してきた。
- ② パウロは、テトスを大いに信頼していた。

2. 執筆目的

- (1) この手紙は、テトスを訓練するためのフォローアップ・レターである。
 - ① パウロからの手紙を受け取り、テトスはどれほど喜んだことだろうか。
 - ② 私たちも、メンターとしての責任を自覚すべきである。
- (2) 長老を任命する際の、長老の資格について助言を与える。

①内容は、テモテへの手紙第一に記されたものとほぼ同じである。

(3) クレタ島の住民に関して、警告を与える。

①テト 1:12

Tit 1:12 クレタ人のうちの一人、彼ら自身の預言者が言いました。／「クレタ人はいつも嘘つき、／悪い獣、／忘れ者の大食漢。」

(4) ユダヤ主義者（律法主義者）に関して、警告を与える。

(5) 信仰と行動を一致させるようにと教える。

Ⅱ. テトスの略歴

1. 4 つの手紙（2 コリ、ガラ、2 テモ、テトス）から推察される 7 項目

(1) ギリシア人（ガラ 2:3）で、パウロによって信仰に導かれた。

①テト 1:4

Tit 1:4 同じ信仰による、真のわが子テトスへ。父なる神と、私たちの救い主キリスト・イエスから、恵みと平安がありますように。

(2) パウロとバルナバに伴ってエルサレムを訪問した。

①異邦人である彼が割礼を強制されることはなかった。

②この事実は、ユダヤ主義者を論駁する強力な証拠となった。

③テトスは、「信仰義認」を体現した生き証人となった。

④ガラ 5:6

Gal 5:6 キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。

⑤テトスの神学的土台は、信仰義認である。

(3) パウロは、コリント教会に手紙を書き、それをテトスに託した。

①その結果、パウロとコリント教会の緊張関係は解消された。

②2 コリ 7:6～7

2Co 7:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことで私たちを慰めてくださいました。

2Co 7:7 テトスが来たことだけでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められました。私を慕うあなたがたの思い、あなたがたの深い悲しみ、私に対する熱意を知らされて、私はますます喜びにあふれました。

(4) エルサレム教会への献金を集めるために労した中心人物の一人であった。

①異邦人信者の使命は、ユダヤ人を物質的に支えることである。

(5) パウロが開拓したクレタの教会を指導する任務をパウロから受けた。

(6) パウロの死の直前、ダルマテヤ（皇帝直轄領のイルリコ州）に行き、そこで伝道した（2テモ4:10、ロマ15:19）。

(7) 伝承によれば、クレタ島のゴルティナで監督となり、94歳で召された。

①キリストの兵士として忠実に歩んだ主の器である。

Ⅲ. 中心聖句

1. テト1:5

Tit 1:5 私があなたをクレタに残したのは、残っている仕事の整理をし、私が命じたとおりに町ごとに長老たちを任命するためでした。

(1) ローマの獄舎から釈放されたパウロは、クレタに行って伝道した。

①その結果、いくつかの教会が誕生した。

②次の地に出て行く際に、テトスを後に残し、牧会伝道の継続を命じた。

(2) テトスをクレタに残した理由

①残っている仕事の整理をするため

*信仰に入って間がない者たちを訓練し、霊的な成長を促す。

②町ごとに長老たちを任命するため

*「長老」と「監督」は、同一の職責である。

*使徒20:17と20:28、1テモ3:1~2と5:17、19

*長老の資格は、1テモ3:1~7に出ているものとほぼ同じ。

*「信者になったばかりの人であってはいけません」（1テモ3:6）が抜けている。

2. テト1:16

Tit 1:16 彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。彼らは忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。

(1) パウロが神学論争をくり広げた論敵は、ユダヤの律法主義者たちである。

①彼らは、「きよいもの」と「きよくないもの」の区別に固執した。

②「きよい人々（キリストによってきよめられた信仰者）」にとっては、「す

べてのものがきよい」。

(2) にせ教師の特徴は、言行不一致にある。

①彼らは、その知性と良心が汚れており、神のわざには不適格な器たちである。

②主イエスの教え（マタ 7：16）

Mat 7:16 あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。

3. テト 2：15

Tit 2:15 あなたは、これらのことを十分な権威をもって語り、勧め、戒めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。

(1) テトスに対する勧告

①老人（長老）

②老婦人

③若い婦人

④若い人々

⑤テトスへの勧め

*パウロから見れば、テトスもまた若者のひとりだったのだろう。

(2) 本当の指導者は、「良いわざの模範となり」「健全なことばを用いて」人々を導く人である。

①誰にも軽んじられてはならない。

②誰にも侮られてはならない。

③言行一致の重要性

4. テト 3：3～6

Tit 3:3 私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快楽の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。

Tit 3:4 しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、

Tit 3:5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。

Tit 3:6 神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

(1) クリスマンは、未信者たちに対して批判的になるべきではない。

①むしろ、「だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者」となるように努力すべきである。

②なぜなら、私たちもかつては彼らと同じような生活をしていた。

(2) 神は誰をも救うことができる。

①神は、私たちを救ってくださったように、今は神に反抗している人々をも救うことがおできになる。

②救いは、「私たちが行う義のわざ」によってではなく、神のあわれみと、聖霊の働きによって与えられるものである。

③人は、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを与えられ、相続人とされる。

(3) 主の働き人は、恵みの力を知る必要がある。

①神の恵みがなければ、私たちは何一つすることができない。

②恵み→善行→敬虔な信仰

60 分でわかる新約聖書 (18) 「ピレモンへの手紙」

1. はじめに

(1) ピレモンへの手紙の位置づけ

①獄中書簡と呼ばれるものが 4 つある。

*エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモン

②テモテへの手紙第一も獄中で書かれたが、分類としては牧会書簡である。

③この手紙は、まさに芸術的と呼ぶべき内容となっている。

④この手紙から学ぶ教訓は、多くある。

(2) 受取人のピレモンは、コロサイ教会の主要な信者である。

①大きな家に住み、奴隷を所有していたので、裕福な信者であることが分かる。

②この手紙は、コロサイ人への手紙と一緒にコロサイ教会に届けられた。

2. アウトライン

(1) あいさつ (1～3 節)

(2) 感謝の言葉 (4～7 節)

(3) 懇願の言葉 (8～20 節)

(4) 締めくくり (21～25 節)

ピレモンへの手紙から教訓を学ぶ。

I. あいさつ (1～3 節)

1. 1～2 節

Phm 1:1 キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンと、

Phm 1:2 姉妹アッピア、私たちの戦友アルキボ、ならびに、あなたの家にある教会へ。

(1) 差出人は、パウロである。

①パウロは自分を「使徒」ではなく、「キリスト・イエスの囚人」と呼ぶ。

②これで、この手紙のトーン（色調）が決まる。

③パウロはピレモンに対してあることを依頼しようとしている。

④目的を達成するためには、命令口調になってはならない。

⑤パウロは、文字通りローマの獄につながれた囚人であった。

⑥と同時に、キリスト・イエスのしもべであるという自己認識を持っていた。

(2) 続いてテモテの名が挙げられている。

①テモテは、獄中のパウロを助けるためにローマに来ていた。

②テモテがこの手紙の証人であることをピレモンに意識させている。

(3) 受取人はピレモンである。

①パウロはピレモンのことを「私たちの愛する同労者」と呼んでいる。

*この言葉には、感謝と信頼とが込められている。

②「姉妹アッピア」、「私たちの戦友アルキボ」、「あなたの家にある教会」

*アッピアはピレモンの妻、アルキボはピレモンの息子だと思われる。

*ピレモンの自宅に信者が集っていた。

*これが、コロサイ教会なのかもしれない。

③この書簡は個人宛てであるが、教会で朗読されることが想定されている。

2. 3 節

Phm 1:3 私たちの父なる神と、主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

(1) パウロの通常のあいさつの言葉である。

①父なる神と主イエス・キリストは、ともに神である。

②恵みとは、受けるに値しない者に与えられる、契約に基づく祝福である。

③平安とは、恵みを体験している者が持つ内面の静寂と安心である。

II. 感謝の言葉 (4～7 節)

1. 4～5 節

Phm 1:4 私は祈るとき、いつもあなたのことを思い、私の神に感謝しています。

Phm 1:5 あなたが主イエスに対して抱いていて、すべての聖徒たちにも向けている、愛と信頼について聞いているからです。

(1) 尊敬するパウロからの言葉で、ピレモンの心は瞬時に開かれたであろう。

①パウロは、主イエスに対するピレモンの信仰のゆえに感謝している。

②ピレモンがキリストの教会に対して示してきた愛のゆえに感謝している。

③ピレモンの善行は、聖徒たちの間に言い広められている。

2. 6～7 節

Phm 1:6 私たちの間でキリストのためになされている良い行いを、すべて知ることによって、あなたの信仰の交わりが生き生きとしたものとなりますように。

Phm 1:7 私はあなたの愛によって多くの喜びと慰めを得ました。それは、兄弟よ、あなたによって聖徒たちが安心を得たからです。

(1) ピレモンの善行が知れ渡ることによって、生きた交わりが育つように。

①これは、ピレモンのさらなる善行を促すためのものである。

(2) パウロは、個人的な感謝の言葉を述べている。

①おべっかや、人を手玉に取るような悪意に満ちた言葉ではない。

②相手を慈しみ、尊敬の念を込めて相手の長所を指摘し、感謝を表わしている。

③箴言 12 : 25

Pro 12:25 心の不安は人を落ち込ませ、／親切なことばは人を喜ばせる。

Ⅲ. 懇願の言葉 (8～20 節)

1. 8～10 節

Phm 1:8 ですから、あなたがなすべきことを、私はキリストにあつて、全く遠慮せずに命じることもできるのですが、

Phm 1:9 むしろ愛のゆえに懇願します。このとおり年老いて、今またキリスト・イエスの囚人となっているパウロが、

Phm 1:10 獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。

(1) この箇所からいよいよ本論に入る。

①パウロは使徒としての権威を用いてピレモンに命じることもできた。

②しかし彼は、へりくだってピレモンに自らの願いを伝えようとしている。

③神の国の価値観では、へりくだっている者が最も偉大な人である。

④パウロは、権威に基づく議論ではなく、愛を根拠にした提案をしている。

(2) 「愛のゆえに」は、2 つの意味に解釈される。

①パウロがピレモンに対して抱いていた愛のゆえに

②ピレモンが聖徒たちに対して抱いていた愛のゆえに

＊愛は自発的な行為を生み出す。

(3) 願いの内容は、ピレモンの元から逃亡してきた奴隷オネシモに関すること。

①パウロは彼のことを、「獄中で生んだわが子オネシモ」と呼んでいる。

＊獄中であつてパウロが、オネシモをキリストに導いた。

②「このとおり年老いて、今またキリスト・イエスの囚人となっているパウロ」

＊この願いは強制ではなく、ピレモンの自発的愛に訴えかけたもの。

2. 11～14 節

Phm 1:11 彼は、以前はあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても役に立つ者となっています。

Phm 1:12 そのオネシモをあなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。

Phm 1:13 私は、彼を私のもとにとどめておき、獄中にある間、福音のためにあなたに代わって私に仕えてもらおうと思いました。

Phm 1:14 しかし、あなたの同意なしには何も行いたくありませんでした。それは、あなたの親切が強いられたものではなく、自発的なものとなるためです。

(1) ここでパウロは、一連の出来事を神の視点からまとめよとしている。

①オネシモという名前には、「役に立つ」という意味がある。

*パウロは、その名前の意味を利用して現状を説明しようとしている。

②オネシモは、かつてはピレモンにとって「役に立たない者」であった。

③しかし彼は、ピレモンにもパウロにも、「役に立つ者」となった。

*福音が逃亡奴隷であったオネシモの心を変えたからである。

④新生の証拠は、為すべきことを為したいと願うようになることである。

*オネシモは、主人の所で忠実に仕えたいと願うようになった。

⑤そこでパウロは、オネシモをピレモンの元に送り返すことにした。

(2) 「彼は私の心そのものです」

①オネシモを送り返すことは、自分の心を届けることでもある。

(3) パウロは再び、ピレモンの自発性を尊重する言葉を書いている。

①オネシモを自分の所にとどめておくのは、自分にとって有益なことである。

②しかし、ピレモンの同意なしには何一つしたくない。

③親切は、強制されたものではなく、自発的でなければならない。

3. 15～16 節

Phm 1:15 オネシモがしばらくの間あなたから離されたのは、おそらく、あなたが永久に彼を取り戻すためであったでしょう。

Phm 1:16 もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、愛する兄弟としてです。特に私にとって愛する兄弟ですが、あなたにとっては、肉においても主にあっても、なおのことそうではありませんか。

(1) オネシモがしばらくの間離れたのは、ピレモンが永久に彼を取り戻すため。

①それも、忠実な奴隷として取り戻すためだった。

②いや、奴隷以上のもの、「愛する兄弟」として取り戻すためだった。

③オネシモは、パウロにとっては主にある兄弟となった。

④そればかりか、ピレモンにとっても兄弟となった。

(2) **ロマ 8 : 28**

Rom 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。

①神の役割

②人の役割

(3) 喪失感で心が沈むとき

①神を愛することが大切である。

②失ったものが自分にとって必要なものなら、それを取り戻す日が来る。

③もし来ないなら、それは元々自分にとって不要なものだった。

4. 17～20 節

Phm 1:17 ですから、あなたが私を仲間の者だと思えば、私を迎えるようにオネシモを迎えてください。

Phm 1:18 もし彼があなたに何か損害を与えたか、負債を負っているなら、その請求は私にしてください。

Phm 1:19 私パウロが自分の手で、「私が償います」と書いています。あなたが、あなた自身のことで私にもっと負債があることは、言わないことにします。

Phm 1:20 そうです、兄弟よ。私は主にあって、あなたの厚意にあずかりたいのです。私をキリストにあって安心させてください。

*4つのアピール

(1) オネシモを迎えてやって欲しい。

①「私を仲間の者だと思えば、私を迎えるように」

(2) オネシモが損害を与えたか、負債を負っているなら、自分に請求して欲しい。

①オネシモがピレモンに損害を与えたのは、確実である。

(3) その負債は、自分が支払うことを約束する。

①「パウロが自分の手で書いています」とは、償いの保証書だという意味。

②次にパウロは、挿入句のように、こう書いている。

「あなたが、あなた自身のことで私にもっと負債があることは、言わないことにします」

*ピレモンは、パウロの伝道によって救われた人であった。

*ピレモンは、パウロに対して霊的な意味での負債を負っている。

(4) 自分もまた、元気づけられたい。

①ピレモンは、他の聖徒たちを元気づけてきた人物である。

IV. 締めくくり (21～25 節)

1. 21～22 節

Phm 1:21 私はあなたの従順を確信して書いています。私が言う以上のことまで、あなたはしてくださると、分かっています。

Phm 1:22 同時に、私の宿も用意しておいてください。あなたがたの祈りによって、私はあなたがたのもとに行くことが許されると期待しているからです。

(1) 従順を確信して

- ①ピレモンが願いを聞き届けてくれるという確信を持って手紙を書いた。
- ②「私が言う以上のことまで、あなたはしてくださる」と付け加えている。
- ③愛とは要求されたこと以上のことを喜んですることである。

(2) 「私の宿も用意しておいてください」

- ①ピレモンがオネシモをどのように扱っているか、自分の目で確かめたい。

2. 23～25 節

Phm 1:23 キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。

Phm 1:24 私の同労者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。

Phm 1:25 主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

(1) 同労者たちの名前が上げられている。

- ①マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカ
- ②ピレモンがどのように応答するか、全員が注目している。
- ③この手紙は、個人的領域を超えて、教会全体が関心を払う内容になっている。
- ④ピレモンの決断が、教会全体を励ますものとなる。

結論

1. 自分は、当然為すべきことを喜んでしているだろうか。
2. 為すべき以上のことを、喜んでしているだろうか。
3. 自分の行動が、教会全体に影響を与えることを理解しているだろうか。
4. 自分の行動によって、他の兄弟姉妹たちを励ましているだろうか。

60 分でわかる新約聖書（19） 「ヘブル人への手紙」

1. はじめに

(1) ヘブル人への手紙の位置づけ

- ①最初は説教のようであるが、最後は書簡のように終わる。
- ②著者と受取人が記されていない。
- ③ある難解な聖句が誤って解釈されている。

2. アウトライン

- (1) 著者は誰か。
- (2) 受取人は誰か。
- (3) 内容は何か。
- (4) 難解な聖句とはどれか。

ヘブル人への手紙から教訓を学ぶ。

I. 著者は誰か。

1. いくつかの名が上げられてきた。

- ①パウロ
- ②ルカ（パウロがヘブル語で書いたものを、ルカがギリシア語に翻訳した）
- ③バルナバ、アポロ、ピリポ、ヨハネ、マルコ

2. 確実に言えること

(1) 著者は、ユダヤ人である。

- ①ロマ 3 : 2 によれば、ユダヤ人には神のことばが委ねられている。
- ②ユダヤ人でなければ、旧約聖書やユダヤ的習慣をここまで知り得ない。

(2) 著者は、第 2 世代のメシアニック・ジューである。

①ヘブ 2 : 3～4

Heb 2:3 こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。

Heb 2:4 そのうえ神も、しるしと不思議と様々な力あるわざにより、また、みこころにしたがって聖霊が分け与えてくださる賜物によって、救いを証ししてくださいました。

- ②これは、パウロの著作説を否定するものではない。

3. パウロが著者である可能性は高い。

(1) テモテと交流がある。

①ヘブ 13 : 23

Heb 13:23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼と一緒にあなたがたに会えるでしょう。

(2) 手紙の最後に出て来る祝祷は、パウロ書簡に特徴的なものである。

①ヘブ 13 : 25

Heb 13:25 恵みがあなたがたすべてとともにありますように。

(3) ペテロの証言 (2 ペテ 3 : 15~16)

2Pe 3:15 また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。愛する、私たちの兄弟パウロも、自分に与えられた知恵にしたがって、あなたがたに書き送ったとおりです。

2Pe 3:16 その手紙でパウロは、ほかのすべての手紙でもしているように、このことについて語っています。その中には理解しにくいところがあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所と同様、それらを曲解して、自分自身に滅びを招きます。

①ペテロは、ディアスポラのユダヤ人たちに 2 通の手紙を書いた。

②パウロも、同じグループに手紙を書いた。

③ペテロは、パウロの手紙を聖書の一部だと認めている。

④聖書の一部が失われることはない。

⑤以上のことから、その書簡はヘブル人への手紙であると類推される。

⑥文章のスタイルがパウロのものではないと反論する人もいる。

⑦受取人やテーマが異なれば、文体は変化する。

4. 執筆時期

(1) 紀元 70 年に神殿が滅びる前に書かれたと思われる。

①神殿崩壊への言及がない。

* 神殿で祭儀が行われていたことが前提となっている。

②テモテはまだ生きていた (ヘブ 13 : 23) 。

II. 受取人は誰か。

1. 著者と同様に、第 2 世代のユダヤ人信者たちである。

(1) 旧約聖書からの引用が多いのは、そのためである。

2. 彼らは、迫害と誤った教理に直面し、ユダヤ教に回帰しようとしていた。

(1) イエス・キリストの福音に関して、疑問を抱き始めた。

- ①神のことばから離れたので、霊的成長がない。
- ②霊的幼子の状態から抜け出す必要があった。
- ③異邦人信者と違って、ユダヤ人信者にはユダヤ教に回帰する心配があった。

(2) 著者と受取人との間には、交流があった。

①受取人は、ある特定のグループのユダヤ人信者である。

②ヘブ 13 : 19、23

Heb 13:19 私があなたがたのもとに早く戻れるように、なおいっそう祈ってくださいよう、
お願いします。

Heb 13:23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。もし彼が早く来れ
ば、私は彼と一緒にあなたがたに会えるでしょう。

Ⅲ. 内容は何か。

1. 福音の優位性を示す 3 つのポイント

(1) 優れたお方 (1～6 章)

- ①預言者よりも優れたお方
- ②天使よりも優れたお方
- ③モーセよりも優れたお方
- ④アロンよりも優れたお方

(2) 優れた祭司 (7～10 章)

- ①アロン系の祭司ではなく、メルキゼデク系の祭司
- ②旧い契約ではなく、新しい契約
- ③地上の聖所ではなく、天の聖所
- ④動物のいけにえではなく、御子の犠牲

(3) 優れた原理 (11～13 章)

- ①信仰の例
- ②信仰による忍耐
- ③信仰の証拠

2. 信仰の成長を促す 5 つの奨励

(1) テーマの進展に沿って、5 つの奨励が挿入される。

- ①みことばから逸れないように (2 : 1～4)
- ②みことばを疑わないように (3 : 7～4 : 13)

③みことばを聞くことに鈍くならないように (5 : 11～6 : 20)

④確信を投げ捨てないように (10 : 26～39)

⑤不信仰に対する警告 (12 : 14～19)

IV. 難解な聖句とはどれか。

1. ヘブ 6 : 4～6

Heb 6:4 一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となって、

Heb 6:5 神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで、

Heb 6:6 墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。

2. 種々の解釈がある。

(1) 解釈①：クリスチャンも救いを失うことがある。

①これは、種々の解釈の中で最も非聖書的なものである。

②救いは神の御業であるので、一度救われた人が救いを失うことはない。

(2) 解釈②：ここに書かれている人たちは、最初から救われていなかった。

①文脈から見て、彼らは救われている。

②彼らは、クリスチャンとしての霊的体験をしている。

(3) 解釈③：ここに書かれていることは、仮定のことである。

①「もし墮落してしまうなら」という意味である。

②しかし、ギリシア語の原文には「もし」という言葉はない。

(4) 解釈④：ここに書かれていることは、報酬を失うという意味である。

①この解釈には、多少の真理が含まれているが、それだけではない。

(5) 解釈⑤：著者の意図だと思われる解釈

①彼らは、救いを経験した信者たちである。

＊「一度光に照らされ、」

＊「天からの賜物を味わい、」

＊「聖霊にあずかる者となって、」

②彼らには、2つの選択肢がある。

＊一時ユダヤ教に回帰し、迫害が去った後、再び救われようとする。

- ・これは不可能である (It is impossible が文頭に出てくる)。
 - ・「自分で神の子をもう一度十字架にかけて」
 - ・キリストが地上に戻ってきて十字架にかかることはあり得ない。
 - ・「恥辱を与える」
 - ・キリストの贖いの御業は不完全だったと表明することになる。
 - ・それゆえ、前進するという選りしかない。
- * もうひとつの選択肢は、ユダヤ教に回帰し、紀元 70 年の裁きを受ける。
- ・この裁きは肉体的裁きである。
 - ・これによって、救いを失うわけではない。

結論

(1) この手紙の受取人たちは、靈的に問題を抱えていた。

- ①靈的成長がない。
- ②ユダヤ教への回帰を考えていた。
- ③神のことばに対する信頼を失っていた。

(2) 彼らを励ます聖句

①へブ 6 : 1~3

Heb 6:1 ですから私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進もうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、

Heb 6:2 きよめの洗いについての教えと手を置く儀式、死者の復活と永遠のさばきなど、基礎的なことをもう一度やり直したりしないようにしましょう。

Heb 6:3 神が許されるなら、先に進みましょう。

(3) キリストの内により優れた祝福がある。

①へブ 12 : 2

Heb 12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

②へブ 13 : 8

Heb 13:8 イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。

60 分でわかる新約聖書 (20) 「ヤコブの手紙」

1. はじめに

(1) ヤコブの手紙の位置づけ

①ヘブル人クリスチャンが同胞のヘブル人クリスチャンに書き送ったもの

＊ヘブル人への手紙と同じ

②この手紙は極めてヘブル的なものである。

＊旧約聖書やユダヤ教の知識を前提として書かれている。

＊ヘブル的方法で読む必要がある。

(2) 著者は、ヤコブである。

①自分のことを、「神と主イエス・キリストのしもべ」と紹介している。

＊「神のしもべ」であり、「主イエス・キリストのしもべ」である。

＊「しもべ」は、ローマ的概念からすると非常に地位の低い存在である。

＊ヘブル的には、「しもべ」は自発的奴隷、権威を受けて派遣された者。

②ヤコブは、主イエスの弟である。

③彼は、主イエスの公生涯の期間には、信者とはならなかった。

④復活を目撃してから、信者となったと思われる。

⑤後にエルサレム教会の監督となった。

⑥4 世紀の教父エウセビオスは、彼を「義人ヤコブ」と呼んでいる。

⑦ヨセフスは、ヤコブが石打の刑に会って殉教の死を遂げたと記している。

⑧ヤコブは、使徒とも呼ばれた（ガラ 1：19 参照）。

＊12 使徒以外にも第二分類の使徒たちがいた。

＊主の復活を目撃したパウロ、バルナバ、ヤコブがそうである。

(3) 受け取り手は、各地に離散したヘブル人クリスチャンである。

①恐らく、迫害によって国外に散らされたヘブル人クリスチャンであろう。

②離散したヘブル人信者は、自分がどの部族出身であるかを知っていた。

③ヤコブは、離散したヘブル人信者を励ますためにこの手紙を書いた。

(4) この手紙のテーマは、「聞くこと」ではなく「行うこと」である。

①「教理」ではなく「行動」である。

2. アウトライン

(1) 試練の意味 (1 章)

(2) 信仰と行い (2 章)

- (3) 舌の制御 (3 章)
- (4) 霊的戦い (4 章)
- (5) 携挙の希望 (5 章)

ヤコブの手紙から教訓を学ぶ。

I. 試練の意味 (1 章)

1. 2 節

Jas 1:2 私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。

- (1) ギリシア語の「ペイラスモス」という言葉には、2 つの意味がある。
 - ①外側からやって来る試練と内側からやって来る誘惑
 - ②この箇所では、最初の意味 (外側からの試練) でこの言葉が使われている。
- (2) クリスマン生活には、さまざまな種類の試練がやって来る。
 - ①それを、罰、呪い、悲劇などと考えべきではない。
 - ②試練の意味を軽視する信仰は、聖書的信仰ではない。
 - ③試練自体を喜べというのではなく、試練を喜びの土台とせよということ。

- (3) この教えは、主イエスの教えとも合致している。

Mat 5:10 義のために迫害されている者は幸いです。／天の御国はその人たちのものだからです。

Mat 5:11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。

Mat 5:12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。

- ①ヤコブが山上の垂訓を聞いた可能性は、大いにある。

2. 3～4 節

Jas 1:3 あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。

Jas 1:4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。

- (1) なぜ試練を喜びとすることができるのか。
 - ①私たちの信仰は、金が精錬されるように精錬される。
 - ②忍耐を働かせるなら、私たちは、クリスマンとして成熟した者となる。
 - ③神の視点から試練を見ることが大切である。

Ⅱ. 信仰と行い (2 章)

1. 1 節

Jas 2:1 私の兄弟たち。あなたがたは、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持っていながら、人をえこひいきすることがあってはなりません。

(1) ここでの信仰のテストは、「社会的地位に基づいて人を評価するな」である。

- ①「人をえこひいきしてはいけません」ということである。
- ②律法は、社会的地位に基づく「えこひいき」を禁じている (レビ 19:15)。
- ③ヤコブは、それと同じ真理を新約時代の信者に適用している。

(2) 人をえこひいきしてはならない理由が、2 つある。

- ①信者は、福音を信じ、その信仰によって救われるという経験をした。
- ②信仰の対象は、「栄光の主イエス・キリスト」である。
*主の栄光に触れた人は、人への恐れやえこひいきから解放される。

2. 14 節

Jas 2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

(1) 修辭的疑問文を用いて、行いのない信仰は役に立たないことを教えている。

①1 章 22 節の原則が再度取り上げられている。

(2) パウロとヤコブの立場の違い (補完的である)

①パウロは、行いによって救われると教えるユダヤ主義者と戦っていた。

*強調点は、「人は信仰により、恵みによって救われる」ということ。

②ヤコブは、無律法主義と戦っていた。

*恵みによって救われた者は、いかなる道德律にも支配されない。

③パウロにとって「行い」とは、「律法を守り行う」ということ。

④ヤコブにとって「行い」とは、「愛と信仰に基づく善行」のこと。

⑤パウロの関心は、「救いの教理」を展開することにあった。

⑥ヤコブの関心は、「実践的な側面」を教えることにあった。

⑦パウロは、救いの方法について論じている。

⑧ヤコブは、救われた証拠について論じている。

Ⅲ. 舌の制御 (3 章)

1. 1~2 節

Jas 3:1 私の兄弟たち、多くの人が教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。

Jas 3:2 私たちはみな、多くの点で過ちを犯すからです。もし、ことばで過ちを犯さない人がいたら、その人はからだ全体も制御できる完全な人です。

- (1) 舌を使用する職責の最初のものとして「教師の務め」を取り上げている。
 - ①多くの者たちが教師になりたがっていたようである。
 - ②ヤコブは、その傾向にブレーキをかけている。
 - ③その理由は、「教師は、格別きびしいさばきを受ける」からである。
 - ④このさばきは、「キリストの御座のさばき」で行なわれるものである。
 - ⑤教師になりたいなら、その賜物があるかどうか、自己吟味すべきである。
 - ⑥教師には、信徒よりも失敗が少ないことが期待されるが、それでも失敗する。
 - * 頻繁に起こるものが、舌（ことば）の使用に関する失敗である。
 - * 一般信徒が発することばについても、同じことが言える。

- (2) ことばで失敗しない人は、「からだ全体も制御できる完全な人です」。
 - ①「完全な人」とは、霊的成熟という目標に達した人のことである。
 - ②その人は、生活のあらゆる部分について自制できる状態になった。
 - ③ことばの制御は、自制心があるかどうかを試す試金石である。

IV. 霊的戦い (4 章)

1. 1 節

Jas 4:1 あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。

- (1) 信者間の争いに対して、ヤコブは怒りを覚えている。
 - ①「あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではないか」
 - ②「からだの中で戦う欲望」とは、罪の性質のことである。
 - ③ほしがっても自分のものにならない。
 - ④自分のものにならないので、人殺しをする。
 - ⑤うらやんでも手に入れることができないので、争う。
- (2) 「さらに豊かな恵み」を得るための 7 つの勧告 (6～10 節)
 - ①へりくだること
 - ②神に従うこと
 - ③悪魔に立ち向かうこと
 - ④神に近づくこと
 - ⑤手を洗い清めること
 - ⑥苦しみ、悲しみ、泣くこと
 - ⑦最後に、再びへりくだること

V. 携挙の希望 (5 章)

1. 7～9 節

Jas 5:7 ですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、初めの雨や後の雨が降るまで耐え忍んで待っています。

Jas 5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。

Jas 5:9 兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。見なさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。

(1) 「忍耐」は、この手紙全体を貫くテーマである (1:2～4 参照)。

- ①信者は、いかなる迫害や苦難の中にあっても、忍耐を働かせるべきである。
- ②「主が来られる時」 (パルーシア) は、目前に迫っているから。
- ③「主が来られる時」とは、地上再臨の時ではなく携挙の時を指す。
- ④その時、信者を苦しめていたいっさいのものが取り去られる。
- ⑤当時の信者たちは、携挙は近いという緊張感と希望を持って生きていた。
- ⑥今も、「主が来られる時」は近いという真理は、変わらない。

2. 10～11 節

Jas 5:10 兄弟たち。苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちを模範にきなさい。

Jas 5:11 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思います。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。

(1) 苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちが模範となる。

- ①主イエスもまたこう語っておられる。

Mat 5:12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。

(2) 最後にヤコブは、ヨブの忍耐を例に上げている。

- ①ヨブは苦難の後に、肉体的、物質的祝福を受けた。
- ②それ以上に素晴らしかったのは、神を「慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方」として知ったことである。

3. 19～20 節

Jas 5:19 私の兄弟たち。あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すなら、

Jas 5:20 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになるのだと、知るべきです。

(1) ヤコブは、信仰生活の上で起こってくる誤解や過ちを正そうとしてきた。

①最後に彼は、自分がしているのと同じことを、読者がするように勧めている。

(2) 「真理から迷い出た者」

①教理的な間違いを犯している者

②その結果、福音の真理からも、主イエスからも離れてしまった者

③道徳的に墮落した者

*福音の真理から外れると、必ず道徳的な墮落が始まる。

④ユダヤ教に回帰した者

*福音の真理から離れたユダヤ人たちは、ユダヤ教に回帰して行った。

(3) 「その人を連れ戻す人」

①真理から迷い出た罪人を、迷いの道から引き戻す人

②その人は、罪人のたましいを死から救い出す。

③ここでの死とは、肉体的な死のことである。

④「死から救う」とは、その人自身がそうするというのではなく、主イエスが働かれるための器として用いられるということである。

⑤「多くの罪をおおう」とは、彼が引き戻した罪人の罪である。